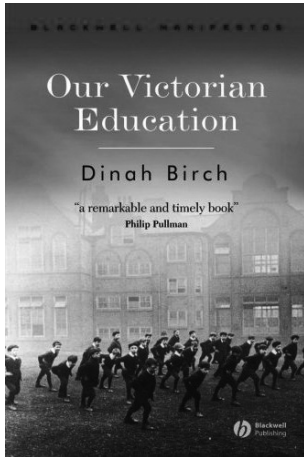


Dinah Birch, *Our Victorian Education*  
Oxford: Blackwell, 2008. 192pp.

市川千恵子



本著はジョン・ラスキン研究で著名な著者によるヴィクトリア朝の教育論である。第1章は教育の浸透の様相を概観しながら、主に教育者マシュー・アーノルドと文学者ウィリアム・ワーズワス、チャールズ・ディケンズらの著作から、学ぶことの葛藤を読み取る。第2章は、教育に対する宗教、特に福音主義の影響を考察したうえで、ラスキンの“The Use of Ignorance”という概念を論じている。また、第3章では女子教育へとテーマが移り、教育論者であり、小説家でもあったエリザベス・スーエルを始めとし、女性と教育問題を中心に据えた女性作家（シャーロット・ブロンテやジョージ・エリオットなど）の作品を再考する。最終章の第4章では現代教育とヴィクトリア朝教育が併置されている。

本著の目的が鮮明となるのは第4章であろう。著者はまず1996年12月の労働党大会（於 オックスフォード大学、ラスキン・カレッジ）でのブレア前首相の有名な演説を引用する。経済的繁栄や社会の団結という目標を掲げた、“my three priorities for government would be education, education and education”という彼の宣言が、英国の教育問題の深刻さを国内外に印象付けたことは、我々の記憶にも新しい。著者は労働党の10年余に渡る努力と教育現場での成果をある程度評価する。しかしながら、国内の統一試験の成績などに基づく学校評価の結果として学校間の競争を煽り、教育現場が混乱したことは見逃せないであろう。著者は教育が競争原理で支配される「ビジネス」ではないことを明言し、試行錯誤を続けながらも、

教育システムの基盤を構築したヴィクトリア朝に、現代教育の活性化のヒントを探ることを示唆するのである。

著者の論考が冴えるのは、やはり長年の研究に裏打ちされたラスキンと教育をめぐる議論である。著者は“*The Use of Ignorance*”というラスキンの着想が知識優先の教育に異を唱えたものであり、ジョン・ヘンリー・ニューマンの「教養教育」をめぐる思想と共通すると考え、“*infinite ignorance*”を称揚するラスキンの真意を学ぶことの謙虚さ、つまり学ぶことの原点に見出すのである。特に *The Stones of Venice* (1853) におけるラスキンのゴシック建築論から教育論へと展開する著者の論考は鮮やかで、説得力がある。ラスキンがゴシック建築の装飾の「素朴さ」をキリスト教の信仰に根ざした想像力豊かな表現として解釈したように、ラスキンにとって教育の本来の目的は知の完成ではなく、心の豊かさであると著者は解釈する (Ch. 2)。それゆえにラスキンは、ルネッサンス期の規則の偏重や古典主義が、ゴシック建築にみられた個人の活力を台無しにしてしまったと批判したのである (Ch. 4)。

著者は躊躇せずラスキンを“*a hero of my book*” (Ch. 4) と位置づける。だが“*Of Queens' Gardens*” (1865) に対する著者の見解には賛成しかねるものがある。フェミニスト批評では評判の悪いラスキンの女子教育論に対して、著者は斬新にも女子教育が中心にあることを否定し、さらに彼の意図が男女の平等にあると論じる (Ch. 3)。しかしながら、女性の聖性を過度に理想化した彼の女子教育論に、著者のような急進性を見出すことは筆者にとっては困難である。

たしかに、ヴィクトリア朝は教育改革の曙ともいえる時代である。それまではごく限られた階層の男性のみが享受してきた教育だが、1870年にはすべての国民に無料で教育を提供する *Forster's Education Act* が制定された。また、*Mechanics Institute* や *University Extension* と成人教育が拡充し、さらに高等教育の門戸が女性にも開放され始め、徐々に多くの人々が教育の機会を手に入れたのである。本著はヴィクトリア朝の教育が良くも悪くも現代英国の教育システムに何らかの痕跡をとどめていることを示唆すると同時に、階級、宗教、ジェンダーをめぐる教育問題の解決策をヴィクトリア朝の教育の理想に照らしながら考察しており、高等教育の岐路に立つ我々にとってもタイムリーな一冊だと言えるだろう。

(釧路公立大学准教授)